

Śrīharṣa による svaprakāśa 論証に見られる vyatirekapramā とは何か

真 鍋 智 裕

1. はじめに

シュリーハルシャ (Śrīharṣa, ca. 12th) は、不二一元論学派の立場から著した *Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā* (Kh) の中で、ブラフマンの本性たる識 (vijñāna) が svaprakāśa であることを論証する。この svaprakāśa 論証の冒頭部において、「否定の正知」(vyatirekapramā) という概念が見られる。この「否定の正知」は、管見では Kh の他の箇所において使用例が見られないばかりでなく、他の不二一元論学派の文献にも殆ど使用例が見られない。しかし、使用例が確認できたもの¹⁾ に関して言えば、識或いはアートマンの svaprakāśa 論証中に見られ、そのことから、「否定の正知」とは svaprakāśa 論証におけるテクニカル・タームであると考えられる。しかし、使用例が殆ど見られないことと、この語が登場する議論の読解が難解なため、「否定の正知」がどのようなものなのかということは捉え難い。そのため本稿では、この「否定の正知」とは何であるのか、ということ进行を明らかにする。

2. 「否定の正知」(vyatirekapramā) とは何か

2.1. Kh による考察

先ずは「否定の正知」が登場する Kh の svaprakāśa 論証冒頭部を検討することによって「否定の正知」とは何かということを探り、その後 Kh の註釈を検討することによって、Kh だけでは明確にならない点を明らかにする。尚、Kh の svaprakāśa 論証冒頭箇所に関しては既に論じたことがあるので²⁾、論証の具体的な検討はそちらに譲り、本稿では最低限の考察にとどめることとする。

シュリーハルシャは先ず、識が svaprakāśa であることを「自律的にのみ確立した本質を有している」(svata eva siddhasvarūpam) ことと言い換え、更にこの「確立した」ということを「正しく知られたこと」(pramitatva) と暗に置き換えて³⁾、以下のように識が svaprakāśa であることを論証しようとしている。また、ここでの

Śrīharṣa による svaprakāśa 論証に見られる vyatirekapramā とは何か (真 鍋) (215)

論証は「他の人々」(apare) 即ち「瑜伽行派」が行うという体裁を採っている⁴⁾ ことが重要である。

そもそも、識が存在している時に、如何なる欲知者にも、「私は認識しているのか、或いは「認識して」いないのか」という疑惑や「私は認識していない」という顛倒や否定の正知 (vyatirekapramā) は存在しない。従って、欲知対象に関して、非真実の知や否定の正知が全て存在しないことが、自身 (非真実の知や否定の正知が全て存在しないこと) を遍充するものである、欲知対象が正しく知られたことを導く。(Kh 119, 2–122, 2)

この議論において注意すべきことは、シュリーハルシャは瑜伽行派の自己認識論の立場を援用して「欲知対象」を、その欲知対象を認識する「欲知者に存在している識」と考えていることである。そのため「識が存在する時に、如何なる欲知者にも、疑惑、顛倒、否定の正知の何れも存在しない」ということを、そのまま欲知対象の視点に移し変えることによって、「欲知対象に非真実の知 (疑惑と顛倒) や否定の正知が全て存在しないこと」とし、それを論証因として、「欲知対象が正しく知られた」ことを導き出しているのである。従って、識 (= 欲知対象) は、それ自身以外の他の要因に依らずに、自身のみで正しく知られることになるため、「自律的にのみ確立した本質を有している」ことが論証されるのである⁵⁾。

以上の識の svaprakāśa 論証から当該の否定の正知に関して判明することは、以下の点である。第一に、「欲知対象に関して疑惑、顛倒、否定の正知が全て存在しないことが、欲知対象が正しく知られたものであることを導く」ということから、欲知対象たる識を対象とし、識を「否定している」(vyatireka) ものであることが判明する。第二に、疑惑と顛倒と並んで、それが存在する場合には欲知対象を正しく知る知でないものと見做されていることが判明する。第三に、「非真実の知と否定の正知」というように、同じく欲知対象を正しく知る知でないものであっても、疑惑や顛倒とは性質が異なっているということが判明する。

しかし、「否定の正知」の「否定」(vyatireka) とはどういった意味であるのか、疑惑や顛倒とはどういった点で異なっているのか、ということがまだ明らかになっていない。以下では、註釈を検討することによって、更に否定の正知に対して考察を加えたい。

2.2. Kh の註釈による考察

アドヴァイタ学派のヴィドヤーサーガラ (Ānandapūrṇa Vidyāsāgara, ca. 1250–1350) による *Vidyāsāgarī* (ViS, or *Khaṇḍanapakkikāvibhajana*) において否定の正知は以下のように説明される。

(216) Śrīharṣa による svaprakāśa 論証に見られる vyatirekapramā とは何か (真 鍋)

否定の正知とは、[認識] され得るものを把捉しないことより生じた、[認識され得るものが]「存在しない」という知であり、「私は決して認識していない」というものである。(ViS 41, 15)

認識され得るものを把捉しないことより生じた、対象が存在しないという知とは、「非存在の正知」(abhāvapramā) のことである。従って、否定の正知とは、非存在を捉える、非存在の正知ということとなる。以上のことから、「否定」(vyatireka) とは「非存在」(abhāva) という意味であることが判明する。

また、Kh の検討によって、否定の正知は識を対象としていることが明らかになっているので、否定の正知とは「識が存在しないことを正しく知る知」であると推測される。ここでは、否定の正知の対象がどういったものであるかを明確に述べているスーリヤナーラーヤナシュクラ (Sūryanārāyaṇaśukla, ca. 20th) の *Khaṇḍanaratanamālikā* (KhR) を検討することとする。

存在している、正しく知られていない欲知対象は、疑惑か顛倒のどちらか一つの対象であり、[一方] 存在していない、正しく知られていない欲知対象は、疑惑か否定の正知の [どちらか一つの] 対象領域である。(KhR 121, 26-27)

ここでは、Kh の主張上実際には起こり得ないことではあるが、欲知対象が正しく知られていない状況が想定され、更にその状況が、その欲知対象が存在している場合と存在していない場合に分けられている。そして、欲知対象が存在していない場合には、それは疑惑と否定の正知のどちらか一つの対象であるとされている。欲知対象とは欲知者の識のことであつたので、このことは、欲知対象である識が存在していない場合、その識は疑惑か否定の正知のどちらか一つの対象であるということとなり、否定の正知とは「識が存在しないことを正しく知る知」であるということとなる。従って、先程の推測が正しかったことが明らかとなった。

しかし、「否定の正知」は「正知」(pramā) と言われているように、正しい知である。それにも関わらず、否定の正知が存在する場合に、否定の正知が欲知対象を正しく知る知でないのはどうしてであろうか。それに対する答えは、否定の正知とは、欲知対象たる識が存在しない場合に、その識が存在しないことを正しく知るという、知の非存在に関する正知である。従って、欲知者に識が存在する時には、否定の正知は生じ得ないのである。そのため、欲知対象たる識が存在していない場合には否定の正知は欲知対象を正しく知る知であるが、欲知対象たる識が存在している以上、そのことと矛盾した認識内容を持つ否定の正知は欲知対象を正しく知る知では有り得ないのである。そして、この点が、同じく欲知対象を

Śrīharṣa による svaprakāśa 論証に見られる vyatirekapramā とは何か（真 鍋） (217)

正しく知る知ではないにもかかわらず疑惑と顛倒と性質を異にしている理由であると考えられる。というのは、疑惑と顛倒は「非真実の知」と言われているように、常に誤った知である⁶⁾。従って、否定の正知は、「欲知対象たる識が存在している」という前提があるが故に、欲知対象を正しく知る知でないとされるので、疑惑と顛倒とは性質が異なっているのである。

3. まとめ

以上の考察に依って、Kh の svaprakāśa 論証における否定の正知とは、「知の非存在の正知」であることが判明した。更に、欲知対象たる識が存在していない場合には正しい知であるが、その識が存在しているが故に、そもそも誤った知である「非真実の知」たる疑惑と顛倒と並んで、欲知対象を正しく知る知でないものと見做されていることも明らかとなった。

しかし、Kh において「識が存在している時に」という前提があるため、否定の正知が存在しないことはわざわざ述べる必要がないように考えられる。そのため、何故この svaprakāśa 論証にわざわざ否定の正知が存在しないことが述べられる必要があるのかという問題が残る。この問題に関してはチトスカ (Citsukha, ca. 13th 前半) の *Tattvapradīpikā* の平行な議論の考察と併せて別の機会に検討することとしたい。

1) 筆者が確認できたのは、Citsukha (ca. 13th) の *Tattvapradīpikā*, Madhusūdana Sarasvatī (ca. 1500) の *Advaitasiddhi* それぞれにおける svaprakāśa 論証中における使用例のみである。

2) 真鍋 [2012] 参照。

3) Anubhūtiśvarūpa (ca. 12th–13th) の註釈 *Śiṣyāhitaśiṇī* (ŚH) に依る。「みずから輝くものという語の意味を述べる。[識は] 自律的にのみ確立したあり方を有している、即ち正しく知られた本質を有しており、それ自身が存在する場合に、みずからによってのみ正知である、という意味である」(ŚH 32, 8–9)。

4) 「更に、他の人々 (apare), 即ち心も空であることを承認することに関して意が確信に到達しない者達であり、「あらゆるあり方で、この一切は存在しないものに他ならない」と全く軽率に述べることに耐えられない者達は「以下のように」考える」(Kh 118, 3–119, 1)。この「他の人々」(apare) に対して、Raghunātha Śīromaṇi (ca. 1530) の *Khaṇḍanabhūṣaṇi* (KhBhū) は次のように言う。「瑜伽行派の、実際に存在する、外界の対象を欠いた刹那的な識を承認するための見解を、一方他の人々は、と導入する」(KhBhū 118, 15–16)。

5) 以上の議論に対する詳細な検討は真鍋 [2012] 参照。

6) 疑惑は以下のように定義づけられる。「背反する多くの種類のものに依存する観念が、私は認識している、或いは「認識して」いない」という疑惑である」(ViS 41, 14–15)。一方、顛倒の定義は以下のものである。「それでないもの (not A) に対するそれ (A) の理解が、知られて

(218) Śrīharṣa による svaprakāśa 論証に見られる vyatirekapramā とは何か (真 鍋)

いる対象に対する, 「私は認識していない」という顛倒である」(ViS 41, 14)。

〈参考文献〉

Kh: *Khaṇḍaṇa Khaṇḍa Khāḍya of Śrī Harṣa with five Commentaries*. Ed. Sūrya Nārāyaṇa Śukla, 1936. Repr. 1999 (Chowkhamba Saṅskrit Series 82). ŚH: *Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya of Śrī Harṣa with Śiṣyahitaiṣiṇī Ṭikā of Anubhūtiśvarūpācārya*. Ed. E. A. Solomon, 1990 (Research Publication Under U. C. G. Grant-31). ViS: *Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍyam of Śrī Harṣa with Khaṇḍanapakkikāvibhajana of Ānandapūrṇa, Hindi Commentary Khaṇḍanapañjikā of Swāmī Yogīndrānanda*. Ed. Swāmī Yogīndrānanda, 1992 (Vidyābhavana Prācyacyā Granthamālā 9).
 KhBhū: See Kh. KhR: See Kh. Jhā [1986]: Gaṅgānātha Jhā, trans. *The Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya of Shri-harṣa, an English translation Vol. 1*. 1911–1918. 2nd ed. 1986 (Sri Garib Dass Oriental Series 34). Granoff [1978]: P. E. Granoff, *Philosophy and Argument in Late Vedānta: Śrī Harṣa's Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya*. 1978. D. Reidel Pub. Co. 真 鍋 [2012]: 真鍋智裕「シュリーハルシャによる識の svaprakāśa 論証」『久遠—研究論文集』3, 早稲田大学仏教青年会, 2012.

〈キーワード〉 *Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya*, Śrīharṣa, svaprakāśa, vyatirekapramā, abhāvapramā
 (早稲田大学大学院)

新刊紹介

高崎 直道 監修 桂 紹隆・斎藤 明・下田 正弘・末木文美士 編

『空と中観 シリーズ大乘仏教 第6巻』

A5 版・242 頁・本体価格 2,800 円
 春秋社・2012 年 11 月